

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06784

研究課題名(和文)紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言のアクセント研究

研究課題名(英文)A study on the Accents of the Dialects of the Southeastern Kii Peninsula

研究代表者

平田 秀 (HIRATA, Shu)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：60777613

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言のうち、5方言(尾鷲市尾鷲方言、同市古江方言、同市九鬼方言、同市須賀利方言、北牟婁郡紀北町長島方言)について現地調査を実施し、その共時的なアクセント体系について記述的な研究を実施した。諸先行研究により、同地域には多様なアクセントをもつ諸方言が分布していることが指摘されている。申請者による現地調査の結果でも、式(文節全体が担う声調的要素)の対立をもつ多型アクセントである尾鷲方言・九鬼方言・須賀利方言、式の対立をもたない多型アクセントである長島方言、型の対立の少ない古江方言と、前述の5方言に限っても非常に多様なアクセント体系をもつ方言がみられる結果となった。

研究成果の概要(英文)：The descriptive study based on the fieldwork was done on the five dialects of the Southeastern Kii Peninsula. The five dialects are as follows: the Owase dialect (Owase City, Mie Prefecture), the Furue dialect (Owase City), the Kuki dialect (Owase City), the Sugari dialect (Owase City), the Nagashima dialect (Kitamuro District, Mie Prefecture). The previous studies argue that the dialects of the Southeastern Kii Peninsula have diverse accent systems. In this study, the diversity of the accent system was also confirmed in the five dialects. The three dialects, (the Owase dialect, the Kuki dialect, and the Sugari dialect) have the multi-pattern accent systems with tonal registers. The Nagashima dialect has the multi-pattern accent system without tonal registers. The Furue dialect has the small number of the accentual distinction.

研究分野：言語学

キーワード：言語学 日本語アクセント論 三重県

1. 研究開始当初の背景

三重県下および和歌山県下諸方言のアクセントについて、三重県北中部や、和歌山県のほぼ全域では京都方言や大阪方言と系統を同じくする中央式諸方言が話されていることが広く知られている。一方で、尾鷲市や紀北町など三重県南部や、和歌山県東端の熊野灘沿岸地域では、中央式諸方言とは系統を異にする方言が話されていることが早い段階から指摘されている。

図1は、中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』による「京阪系アクセント」の分布図であり、京都方言・大阪方言と同一の系に属すると判断された方言の話されている地域が示されている。

付1 京阪式ア分布図

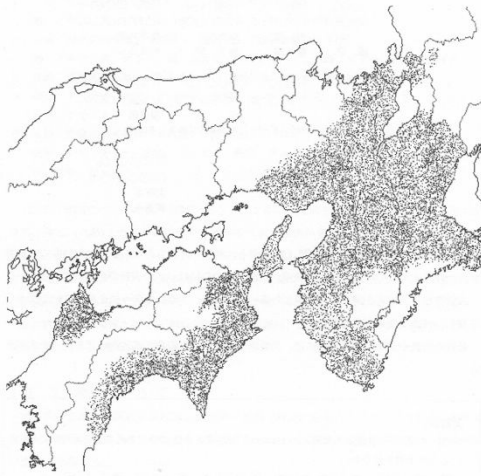


図1 京阪式アクセント分布図

熊野灘沿岸地域では、三重県北中部とアクセント上の系統の異なる方言が話されていること、地区ごとに大きく異なるアクセントを持つ諸方言が分布していることが指摘されていた。この問題を扱った先行研究の代表として、金田一春彦(1975)『日本の方言-アクセントの変遷とその実相』が挙げられる。

しかしながら、早い段階の研究は諸方言の系統関係を明らかにすることに主眼が置かれており、主に拍数の短い語についてのみ記述がなされていた。系統論においては、2拍名詞のアクセントのふるまいが特に重要視されているが、それぞれの方言が共時的にどのようなアクセント体系をもつかについては、拍数の長い語についての情報が必要不可欠である。

本研究は前述の先行研究の情報を鑑み、熊野灘沿岸地域諸方言の共時的なアクセント体系を明らかにすることを目指し、現地調査に基づいた最新の見解を提示することを目標として遂行する。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言について、その共時的なアクセント体系の詳細を明らかにすることである。

申請者によって、三重県尾鷲市尾鷲方言については網羅的な現地調査・記述的研究がなされている。尾鷲方言は、以下の通り、日本語アクセント類型論において非常に稀な性質をもつ。

- 文節全体が担う声調的要素である「式」の対立が3種類存在する
- 高く始まるか低く始まるかが一定しない「式」が存在する

式とは文節全体が担い手となる声調的要素であり、それぞれの拍が担い手となる「核」とは別個に存在する、日本語アクセント論上の概念である。申請者の調査・研究により、尾鷲方言には3種の式の対立が存在すると結論づけられる現象が確認された。3種の式の対立をもつ日本語方言の報告は、これまでに香川県観音寺市伊吹島方言1つがあるのみであり、非常に稀な音韻的特徴であると言える。高く始まるか低く始まるかが一定しない式の存在については、連続変調(tone sandhi)の枠組みでとらえられうるものであると申請者は解釈している。連続変調は漢語系の言語・方言におけるものが広く知られており、日本語方言において連続変調が観察されることは、さきの3種の式の対立と合わせて、音韻論の類型論に与えるインパクトが大きいものと考えられる。

尾鷲地区は、図1の京阪方言と系統の異なる方言が話される地域のほぼ中央に位置する地区であり、周辺地区においても申請者が同様の調査研究を行うことで、前述の日本語アクセントの類型論上稀な特徴をもつ方言が確認される可能性がある。

(2) 本研究は、同地域諸方言について、その共時的なアクセント体系の詳細を明らかにすることを目標とする。先に述べた通り、同地域諸方言アクセントに関する諸先行研究は、方言間の系統関係を明らかにすることをめざしたものであり、短い語彙についての記述にとどまっている。その方言における拍数の長い語彙がどのような音形で出現するかといった、アクセント体系全体についての推測・解釈が先行研究の資料からでは不可能な方言も含まれる。本研究では、そのような状況を打開すべく現地調査を実施し、長い拍数の語彙を含めた網羅的な資料を得ることで、アクセント体系の全容を明らかにしようとするものである。

(3) 本研究は、以下a~cの3点をめざして遂行する。

a. 方言記述の精確化

早い段階のアクセント研究では主として

諸方言の系統関係が注目されていたが、近年の研究者により、網羅的で精緻な調査に基づいて諸方言のアクセント体系を明らかにする研究が活発に行われている。申請者も、そのようなアクセント研究の変化の一翼を担いたいと考えている。

b. 危機方言の記録

過疎高齢化による方言話者数の減少、経年変化による古態の消失は、全国的に直面している喫緊の問題である。特に熊野灘沿岸地域は近年過疎高齢化の進行が深刻である。三重県尾鷲市内には居住者のうち 65 歳以上の占める割合が 80% を超える地区も存在し、一刻も早い調査・研究が望まれる。同地域において方言の調査・研究を行うことは、危機方言の記録・保存という観点からも価値の大きいものと考えられる。

c. 日本語アクセント類型論へのインパクト
前述の通り、尾鷲方言は非常に稀なアクセント上の特徴をもつ。熊野灘沿岸地域の他の方言にも同様の特徴がみられるか否かを観察することで、前述の特異性の分布についての報告が行える。

3. 研究の方法

金田一 (1975) 『日本の方言-アクセントの変遷とその実相』では、紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言について、「甲乙兩種の中間方言尾鷲式」「甲乙兩種の中間方言 長島式」「型の区別の少ない方言」など、全 10 種のラベル付けがなされている。

本研究では、同地域諸方言のアクセントの多様性をとらえるため、金田一 (1975) の分類に基づき、尾鷲方言と大きくアクセント上の特徴が異なるとされる方言と、尾鷲方言に類似のアクセント体系をもつとされる方言の両者について、現地調査を実施するものとする。

尾鷲方言と大きくアクセント上の特徴が異なるとされる方言の中で特筆すべきは、金田一 (1975) で「型の対立の少ない方言」とされた、尾鷲市三木里方言・古江方言の 2 方言である。この 2 方言は、1 拍名詞および 2 拍名詞において、2 つのアクセントの対立しかないとされる。しかしながら、3 拍語・4 拍語といったさらに長い語において対立数はいくつ存在し、どのような音形で出現するかの情報は先行研究にない。共時的にどのようなアクセント体系をもつかを結論づけるためには、現地調査を実施してデータを収集する必要がある。

また、金田一 (1975) で「甲乙兩種の中間方言 長島式」とされた紀北町長島方言・二郷方言は、上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (2)」では、尾鷲方言にみられたような式の対立がなく、アクセント体系そのものは東京方言と同じく下

げ核の有無と位置のみで記述される体系であるという。これらの方言についても、尾鷲方言と近隣の地区であるにも関わらず、大きく類型論的な位置付けが異なると言える。

一方で、尾鷲市須賀利方言、尾鷲市九鬼方言などは、金田一 (1975) では「甲乙兩種の中間方言 尾鷲式」として、同一の区分に属するとされる。この分類の妥当性の検討を行いつつ、豊富に存在する申請者による尾鷲方言のデータと対照しながら、共時的なアクセント体系の解明をめざした現地調査を行う。

4. 研究成果

平成 28 年度・平成 29 年度中に、以下の 5 地点について調査・研究を行った。その概要は、以下の図 2 の通りである。



図 2 現地調査を実施した各地区

現地調査を実施した各地点についての概要は以下の通りである。

- 尾鷲市尾鷲方言：式の対立をもつ多型アクセント
前述の通り、3 種の式の対立をもつ方言である。この 3 種の式の対立は、2 種の式の対立をもつ段階から式が分裂して対立数が増えるに至ったと考えられる。この 3 種の式の対立をもつに至る経緯を解明するにあたって重要な示唆に富む、同方言の助詞のアクセントについて、口頭発表「三重県尾鷲方言の助詞のアクセントについて」を行った。
- 尾鷲市九鬼方言：式の対立をもつ多型アクセント
九鬼方言は尾鷲方言と同じく、金田一 (1975) で「甲乙兩種の中間方言 尾鷲式」とラベル付けされた方言である。九鬼方言には現時点の調査で 2 種の式の対立が観察され、尾鷲方言でみられた 3 種の式の対立は観察されなかった。また、尾鷲方言にみられた式の関わる連続変調の現象はみられなかった。
- 尾鷲市須賀利方言：式の対立をもつ多型アクセント

須賀利方言は尾鷲方言・九鬼方言と同じく、金田一 (1975)で「甲乙兩種の中間方言 尾鷲式」とラベル付けされた方言である。アクセントの体系としては須賀利方言と九鬼方言が非常に類似の体系であり、2種の式の対立が観察され、式の関わる連読変調の現象はみられなかった。

- 北牟婁郡紀北町長島方言：式の対立をもたない多型アクセント

長島方言は、金田一 (1975)で「甲乙兩種の中間方言 長島式」とされた方言である。尾鷲方言・九鬼方言・須賀利方言にみられた式の対立はなく、下げ核の有無と位置の対立のみで記述される、式の対立をもたない多型アクセントであると結論づけられる結果であった。

- 尾鷲市古江方言：型の対立の少ない方言

古江方言は、金田一 (1975)で「型の対立の少ない方言」とされた方言である。古江方言を扱った諸先行研究では、2拍名詞に2つの型の対立があるとされているが、申請者による現地調査の結果、2拍名詞に3つの対立、3拍名詞に2つの対立、4拍名詞に2つの対立が認められる結果となった。

古江方言が共時的にどのようなアクセント体系をもつかについては、さらなる調査・研究が必要な状況である。しかしながら、式の対立をもつ多型アクセント方言である尾鷲方言・九鬼方言・須賀利方言や、式の対立をもたない長島方言とは、共時的に大きく異なる特徴をもつアクセント体系であると言える。

研究期間最終年度の平成 30 年 3 月には、現地調査を行った全 5 方言についてのデータを束ね、熊野灘沿岸地域諸方言のアクセント類型論の形成をめざした口頭発表「熊野灘沿岸地域諸方言における式の対立」を行った。前述の通り、同地域には多様なアクセント上の特徴を持つ諸方言が分布することを、式の対立に主眼をおいて述べた。

決して地理的な隔たりの大きくない中で同地域諸方言のアクセントにおいて大きな多様性が観察されることは、日本語アクセント論のみにとどまらず、通言語的な音韻論においてもインパクトの大きいものと考えられる。今後、本研究において現地調査に未着手の地点においても現地調査を実施することで、同地域諸方言の多様性について、さらに発展させた論が展開できるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)
なし

〔学会発表〕(2件)

平田秀、「熊野灘沿岸地域諸方言における式の対立」、第13回音韻論フェスタ、2018年
平田秀、「三重県尾鷲方言の助詞のアクセントについて」、共同研究プロジェクト「対象言語学の観点から見た日本語の音声と文法」音声研究班研究発表会、2016年

〔図書〕(計0件)
なし

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕

ホームページ等

一般向けパンフレット「アクセントの研究から見た尾鷲弁」

一般向けウェブサイト「アクセントの研究と尾鷲弁」

<https://kishu.aa-ken.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平田 秀 (HIRATA, Shu)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・特任研究員

研究者番号：60777613

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし